

ごあいさつ



日本WHO協会理事
大阪府看護協会会長
弘川 摩子

コロナ禍における宿泊療養施設での看護

大阪府看護協会では、コロナ対応として、ワクチン接種 重症コロナセンターなどいくつかの事業を大阪府からの要請により協力してきました。その中で2020年4月24日から2023年5月8日まで宿泊療養施設の運営に携わりました。看護師の派遣は、延べ数で、52,909名であり、宿泊療養者延べ数は、1,156,405名です。2施設から始まり、最大で41施設まで拡大しました。当初は軽症者だけを対象としていましたが、治療法の進歩により療養施設内でも治療が行われるようになり、中等症や基礎疾患を持つ方や、認知症のある方などすべての年代を対象に看護介入を行ってきました。ここでは、健康観察を行うことが看護業務の中心ですが、電話を通しての観察であり、まさしく顔の見えない関係づくりとなりました。現場では、タブレットを使いながら電話での情報をアセスメントし入力する。そのほか、PPE着用での急変対応 オンライン診療 酸素濃縮器やハートラインを使い対応しました。携わった看護師は、潜在看護師 教育機関、医療機関で兼務許可が出る施設などから集まっており、潜在看護師の中には、海外で活動する看護師たちがコロナで活動が中止なったことによりこの事業に参加していました。

看護師にとって今までは対面で表情の確認や触診などでアセスメントを行っていましたが、1日2回の電話での健康観察は、電話から聞こえる声 息遣い 大きさ タイミング 話す内容など限られた情報から状態をアセスメントすることになりました。実際症状の悪化をキャッチし、入院へつなげることもあります。まさに聴覚を駆使した看護です。また、入所者の不安は、身体的不安だけではなく、隔離という状況から生まれる精神的な不安もありました。得られた情報は、しっかりと申し送りを行うことで直接会ってはいないものの入所者の人物像が見えてくると看護師たちは、言っています。

外国人も来られた為、英語 中国語 韓国語 ポルトガル語 フランス語 スペイン語 ベトナム語の問診票の作成 ポケトークや電話通訳サービスなどを活用しました。

「目で見えるWHO」でも世界で活躍した看護師の体験は、広く多くの方に情報発信できればと思います。看護職の活動を引き続き発信していきたいと思っています。

令和5年10月